

影響が、天然も養殖も含めた漁獲全体に多大な影響を与えつつあります。未だに一部には地球温暖化や気候変動に対する懐疑的な見方がありますが、基本的に温暖化の原因や傾向についての議論の余地はあっても、温暖化自体はデータとして蓋然性の高い“事実”です。実際、世界各地で海水温の上昇は続き、海の世界連鎖や生態系循環が弱まり、漁場が少しずつ移動しており、水産資源が存続しにくい港や漁場が増え、地域の持続が難しくなるケースも出てきます。



アラフラ海のトロール船

令和6年度の水産白書では、ブリやサワラなどの機動性の高い魚種の生態系がどのように移動しているのか、明治から令和間の各地での漁獲変動が可視化されていました。近年、福岡近海ではとうとうブリが正月に間に合わないようになり、10年ほど前に長浜魚市場の方々がブリの水揚げの応援指導をしていた北海道では、今や定置網で秋サケの代わりにブリの豊漁が定番だそうです。

我々の水産子会社がインドネシアで国から操業許可を受けている漁場は、パプアニューギニア島とオーストラリアの間にあるアラフラ海という美しい海です。幸い春先から例年並みに素晴らしい天然ホワイト海老は無事に漁獲できましたが、秋口からの主力である看板商品のイリアンタイガー（元祖“SEA ANGEL”）は今ひとつ揚がってきていません。この海で2025年平均の海水温上昇は操業海域での観測値で前年比2℃を越えていました。

【今後の抱負】

非常に緩やかな変化ではありますが、既に世界の天然魚ベースの水産資源や漁業の衰退を止めるのは、極めて難しい局面に入りつつある、というのが私の実感です。さらに地球温暖化は、静かにあらゆる産業・社会にマイナスの影響を及ぼしつつあります。

だからこそ、今年の一文字は『備』。厳しい未来を見据え、守り残せるものは何か、新たな別の道はないか…時間をかけて選択肢を取り揃え、地道に備えを積み上げていこうと考えています。

エッセイって難しい…(汗)。今回、株式会社やまやコミュニケーションズの山本正秀社長から頂いたバトン、私からはリックス株式会社の安井卓社長にお渡しいたします。安井社長、どうぞよろしくお願いいたします。

<追伸:今年こちらも悩ましい…テーマ本>
「インフレ・円安・バラマキ・国富流出 (日経プレミアシリーズ)」新書 - 2026/1/25 発売
著者:ふくおかフィナンシャルグループ

チーフ・ストラテジスト 佐々木 融 氏

TOKUSUI

株式会社トクスイコーポレーション
代表取締役会長
徳島 建征



<https://www.tokusui.co.jp/>